



「ほっかいどう学新聞」が創刊!

北海道総合開発計画(第8期)が進める「ほっかいどう学」の推進母体である「NPO法人ほっかいどう学推進フォーラム」(令和元年設立)のニュースレター「ほっかいどう学新聞」が創刊されました。NPO法人の活動等が紹介されております。詳しくは、NPO法人のホームページをご覧ください。(decは、NPO法人の事務局運営やほっかいどう学を推進する各種活動に協力しています)

創刊号(2020年 春号)

〈巻頭ページ〉

コロナ後の北海道のために ～今こそ、北海道愛を育てよう～

特定非営利活動法人
ほっかいどう学推進フォーラム 理事長 新保 元康

〈TOPICS〉

「ほっかいどう学連続セミナー」開催される

- ・第1回 空知の魅力再発見
- ・第2回 オホーツクの魅力再発見

〈NOTICE〉

シンポジウム、連続セミナー開催、
副読本の実態調査など、活動拡充

〈その他〉

ほっかいどう学へ、各界から期待高まる!



「ほっかいどう学」とは? 北海道は、急速な人口減少やグローバル化の荒波の中で大きな転換期を迎えています。この荒波を乗り越えていくには、北海道を愛し、北海道をよく知り、北海道のさらなる発展に貢献する多様な人材の養成が欠かせません。「ほっかいどう学」は、より多くの人々が地域づくりに関心を持つ契機を創出するため、北海道の魅力や地理、歴史、文化、産業等を「ほっかいどう学」として、子どもから大人まで幅広く学び、地域に関する理解と愛着を深める取り組みです。北海道開発局HP▶



「シーニックドライブマップ 2020年度版」 好評販売中! 定価200円(税込)

今年のテーマは、北海道ならではの絶景が待っている、「秀逸な道」。ご当地ソフトクリームを集めた「ソフトクリームde道の駅」ほか、寄り道スポット、ビューポイントと一緒に、シーニックバイウェイ北海道のスタッフがおすすめするドライブコースを紹介します!



🏠 「道の駅」マップ付き! 全道の道の駅で購入できます!

編集後記

気温も20度上がる日も増え、いよいよ春らしくなってきました! やっと緊急事態宣言も解除され(5月25日現在)、どこかへ行きたい気持ちが爆発しそうな今日この頃(笑)。でも今しばらくはその気持ちにブレーキをかけつつ、徐々に日常を取り戻していきたいですね! さて、今回の巻頭インタビューは、一日も早い開業が待たれるウポポイ 民族共生象徴空間運営本部副本部長の登場です。開業前にアイヌ民族の背景や村木館長の思いを知れば、実際に訪れた時の楽しみも倍増するはず! 開業の際はぜひお越しくださいね! (RW)

dec monthly vol.417

2020年6月1日発行

発行人 山口 登美男

編集人 山口 登美男

発行所 一般社団法人 北海道開発技術センター

TEL (011) 738-3363

FAX (011) 738-1889

URL <http://www.decnet.or.jp/>

E-mail dec_info01@decnet.or.jp

〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17

〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17

〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17

〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17

〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17

〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17

〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17

〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17

〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17

〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17

〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17

〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17



Hokkaido Development Engineering Center

dec monthly

2020.6.1 vol.417 デックマンスリー



● Monthly Topic (マンズリートピック)

令和2年度 dec定時総会 開催報告

● dec Report (デックリポート)

日本風景街道大学 in 宮崎 参加報告

dec Interview >>> 公益財団法人アイヌ民族文化財団 民族共生象徴空間運営本部副本部長 村木 美幸 氏

コロナ禍で4月開業予定が遅れている「民族共生象徴空間ウポポイ」。一日も早い全面開業が待たれます。開設地である白老町ポロト湖畔の「アイヌ民族博物館」(1965～2018年)で長くアイヌ文化の伝承・復興活動に携わり、現在、ウポポイの運営の中核で開業準備に専心する村木美幸さんをお訪ねしました。

ウポポイは国立アイヌ民族博物館、国立民族共生公園、慰霊施設から成るアイヌ文化復興のためのナショナルセンターです。まず、開設までの経緯についてお聞かせください。

日本の先住民族であるアイヌは、明治以降の同化政策などによりアイヌ語や風俗、習慣など、その文化は消滅の危機にさらされてきました。そのような状況については国の責務も含め長く議論されてきましたが、その背景には1950年代から米国などで活発化した先住民族の権利運動が大きく関わっています。80年代には国連において先住民族に関する作業部会が設けられて国際的な取り組みは進み、2007年には「先住民族の権利に関する国連宣言」が採択されました。その宣言には日本も賛成し、翌年には衆参両院で「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」が全会一致で採択されます。これを受けて、国は「アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会」を立ち上げて検討し、その懇談会報告書において国が実施する具体的政策として挙げられたのがアイ

ヌ政策の『扇の要』として提言された「民族共生の象徴となる空間の整備」でした。その整備地が、私が所属した「(一財)アイヌ民族博物館」(以下、旧アイヌ民族博物館)のある白老町ポロト湖畔に決まったのは2011年のことでした。道内各地に候補があったなかで白老が選ばれたのは、この地で50年余りに及ぶアイヌ自らが組織立って行ってきた伝承活動の取り組みが評価されたと受け止めています。2018年に旧アイヌ民族博物館と(公財)アイヌ文化振興・研究推進機構が合併して(公財)アイヌ民族文化財団となり、ウポポイの管理運営主体として開業準備を行っています。

アイヌ民族の歴史や文化については、学校教育でも十分学ばれておらず、未だ「日本は単一民族」と思い込む人は少なくありません。ウポポイに期待される役割は大きいですね。

私は父方がアイヌ、母方が和人です。曾祖母はアイヌレヘ(アイヌ語の名前)でしたが、次の代である明治生まれの祖父からは日本語の名前です。1871(明治4)年の戸籍法の制定によりアイヌは「平民」に組み込まれ、和人と同様に日本語の名前を付けるなど日本語が推奨されました。アイヌ語の禁止令が出たわけではないのですが、学校では日本語しか教えず、アイヌ語は社会で通用しない、使われない言語となっていたのです。また、土地の国有化によってアイヌの生業の転換を強いる勸農政策などの同化政策のなかで

ウポポイは、訪れた人がアイヌ文化を知るとともに、自分自身を再認識する場所。多様な価値観を理解すること、誰にも心地よい社会になることを願っています。

dec Interview

むらき みゆき

1959年白老町生まれ。78年北海道日本大学高等学校卒。85年から(財)アイヌ民族博物館に勤務し、学芸課主幹、同課長、副館長、館長、専務理事を歴任。2018年(公財)アイヌ民族文化財団への改組に伴い、常勤理事に。2020年から現職。著書に共著「聞き書きアイヌの食事」ほか。JR車内誌「The JR Hokkaido」でアイヌ文化を紹介する「ゆこうとみゆきのソノコdeソノコ」を連載中。

アイヌの生活スタイルも変わっていきます。学校教育においてもアイヌと和人では格差がありました。1901(明治34)年に制定された「旧土人児童教育規定」以降、アイヌ児童と和人児童の「別学」を基本とし、第一尋常小学校は和人児童、第二尋常小学校はアイヌ児童が通う学校としました。アイヌ児童においては、就学年齢を7歳、修業年数は4年間と短く、教科も歴史や理科などは除かれるなど、教育制度上においての和人児童との違いや差別は高等教育を受ける機会を奪うことにつながりました。同化政策の結果が負の連鎖を招き、生活の格差、民族差別につながっていったのです。「アイヌ」の3文字は「アイヌのくせに…」、「…だからアイヌって言われるだ」などと私の周りでは使われていたので、アイヌを、アイヌである自分を好きになるのって難しかったですね。「アイヌ」という言葉が「人間」であるという意味、文化は優劣で比べるものでなく対等なのだと知ったのは旧アイヌ民族博物館に勤務してからです。それでようやくアイヌである自分を受け入れることができました。

アイヌがマイノリティになっていく歴史的流れの中で、言葉だけでなく生業や生活習慣などアイヌと異なる価値観を押しつけられ、アイヌ文化の本来の価値が理解されないままに差別は生まれてきました。和人が日本語を話すのが当たり前であるならば、アイヌも母語であるアイヌ語を話すのが当たり前です。しかし、現在のアイヌにとってアイヌ語を話すのは「当たり前」ではないのです。なぜ当たり前じゃないのか、「なぜ」、「どうして」という疑問を持ち、考えることが重要だと思います。「当たり前」は、それぞれの立場で違うということを皆が認識すれば、多文化理解につながります。ウポポイはアイヌについて知るだけでなく、それぞれが自身の民族性を再確認する場、日本の文化の多様性を感じる場になると考えます。

日本国内より諸外国の方がアイヌ民族への関心は高いのではないのでしょうか。例えば、海外で読まれている日本の旅行ガイドブックではアイヌに関してかなりの紙幅が割かれています。

18～19世紀にかけてフランスやイギリス、ロシアなどの外国船がアイヌの居住域近海にも姿を見せるようになると、アイヌの風俗などは探検家たちの紀行文などで報告され、ヨーロッパでも知られるようになります。日本の北には自分たちと民族的に近い人々が住んでいるという話が広まり、江戸期に長崎の出島で西洋医学を教えたシーボルトは著書の中でアイヌの日本先住民説や大陸渡來說を唱え、シーボルトの息子ハインリッヒ・シーボルトは明治期に考古学研究で北海道を訪れています。樺太や北海道でアイヌの民族学研究をおこなったポーランドのプロニスワフ・ピウスツキやイギリスの探検家、イザベラ・バードも著書に記しているなど、関心の高さがうかがわれます。

明治期には人類学の分野でアイヌは、ヨーロッパ系に近いコーカソイド説が唱えられるようになると、多くの民族学博物館がアイヌ関係コレクションの収集に力を入れるようになります。シーボルトが集めた資料はオランダのライデン、ドイツのミュンヘン、ベルリンなどの博物館に収蔵されています。ロシアのサンクトペテルブルクのロシア科学アカデミーの博物館クンストカメラやロシア民族学博物館に約5千点、ドイツ国内の博物館には約3千点、イギリスの大英博物館や米国のスミソニアン博物館など、現在も海外各地の博物館にアイヌに関する歴史的資料が収蔵、展示されています。

ウポポイの中核施設である国立アイヌ民族博物館は東北以北で初の国立博物館です。方針として大事にされていることは何でしょうか。

「アイヌの視点で発信する」ことです。従来、博物館などでアイヌの歴史や文



写真左：体験交流ホールで行われる伝統芸能上演プログラム
(公財)アイヌ民族文化財団提供



写真右：
ウポポイイメージ図
(公財)アイヌ民族
文化財団提供

化を紹介する際は「アイヌの人々は」などと専ら第三者的な立場で表現されるのが一般的です。アイヌ自らが運営してきた旧アイヌ民族博物館が「私たちアイヌは」と当事者であるアイヌからメッセージを発信してきたように、新しい国立アイヌ民族博物館もアイヌの立場から情報発信していきます。展示は「私たちのことば」、「私たちの歴史」、「私たちのしごと」、「私たちの交流」、「私たちのくらし」、「私たちの世界」の6つのテーマを軸に構成されています。また、博物館内の標示や展示解説文などに使用する言語はアイヌ語が第一言語です。アイヌ語は沙流、静内、千歳、幌別、旭川、釧路、樺太など各地の方言を使って表記されています。アイヌ語を学び、受け継ぐ若い人たちが考え、それぞれの方言で書いたもので、音声ガイドやアプリでそのアイヌ語を聞くこともできます。アイヌ語の他にも日本語や英語はもちろんのこと中国語、韓国語等、多言語で対応します。

多くの人にぜひ伝えたいのは、アイヌの歴史や文化は固定的なものではなく時代とともに動いているということです。アイヌは、アイヌ文様の衣服を着て、森のなかのコタン(集落)に暮らし、鹿や熊を追って生活しているというような、固定的な「かつて」のイメージで捉えられがちですが、暮らしや文化は常に変化し、新しく創造されています。きちんとした時間軸で現代を生きるアイヌについても知っていただきたいと思います。

ウポポイは、単にアイヌについて知るだけではなく、新たな価値観に出会い、理解を深める場になればと思っています。そのことが誰にとっても心地よい、幸せに暮らせる社会をつくることにつながる、そう願いながら日々、仕事をしています。

令和2年度dec定時総会が5月29日、dec4階大会議室において開催され、予定の5議案が滞りなく承認されました。令和元年度の事業報告を中心にお伝えいたします。

会員数(令和2年3月31日現在) 法人会員:223社 個人会員:64名

新任役員 ● 理事:中田 隆博氏 *渡辺 一郎氏は理事を退任されました。長きにわたり、ありがとうございました。

自主研究

モビリティ・マネジメントに関する調査研究

「第14回日本モビリティ・マネジメント会議」にて研究成果の発表を行った。また、豊頃町民に対して町内購買行動を促進する方策を検討するため、筑波大学、豊頃町商工会と共同で「買い物MMM」の研究を行った。

沿道の環境保全、活用に関する調査研究

シーニックバイウエイ北海道の地域住民や団体が行う活動への参加、事務局及び活動支援を行った。また、「日本風景街道大学ニセコ羊蹄キャンパス実行委員会」に参加し、事務局の運営を行った。

公共交通に関する調査研究

「道の駅」がバス等の公共交通の拠点として整備され始めており、現状把握のための調査を実施。また、「第6回おでかけ交通博」、「日本地域学会第56回年次大会」に参加し、研究発表を行った。

北海道エコ・モビリティに関する調査研究

「北海道エコ・モビリティ研究会」を開催し、研究会の実証フィールドで行われたサイクリイベント等の事業実施に参加した。また、「第8回自転車利用環境向上会議」に合わせて専門家を招へいし、意見交換会を行った。

福祉交通やバリアフリーツーリズムに関する調査研究

(一社)日本福祉のまちづくり学会北海道支部の活動支援を行い、高齢者の除雪作業を支援するマッスルスーツを使用した除雪作業の試行を実施した。

「ふゆトピア都市」に関する調査研究

ウィンターライフ推進協議会の活動に参加し、冬道転倒事故防止等に関する啓発サイト運営やつるつる路面の観測及び情報提供等を行った。また、「ボランティア活動による広域交流イノベーション推進研究会」の事務局として除雪ボランティア事業の企画・運営を行った。

吹雪時の視認性に関する調査研究

画像解析技術を用い、道路管理者等に道路管理用CCTVカメラの画像を活用した視界状況の提供を試行した。また、走行車両で撮影した動画からドライバーの視認性を連続的に評価する手法について北海道大学と共同研究を行った。

積雪寒冷地における道路緑化に関する調査研究

北海道の道路緑化に関する各種資料の収集・整理、勉強会及び現地調査を行い、その研究成果を「2019年度雪氷学会北海道支部研究発表会」、「雪氷研究大会」等で発表した。

エコ・コリドールに関する調査研究

道路生態研究会に参加し、情報交換や人的ネットワークの構築に取り組んだ。第25回「野生生物と社会」学会に参加し、話題提供等を行った。また、「日本環境共生学会第22回学術大会」の大会実行委員会に参加するとともに、発表を行った。



第14回日本モビリティマネジメント会議
(石川県金沢市) ポスター発表の様子



マッスルスーツを使用した除雪作業の試行状況

防雪林調査状況

自主研究つづき

エゾシカの被害対策検討に向けた調査研究

環境省対馬自然保護官事務所が主催する「対馬から発信! 野生生物との交通事故を考えるシンポジウム」を共催し、講演者として参加。また、鉄道総合研究所、(一社)アニマルパスウェイ、帯広畜産大学との共同研究を継続した。

土木史に関する調査研究

北海道の土木史や道路史に関わる調査を行い、「ISCORD2019」、「第39回土木学会土木史研究発表会」で発表。また、「北海道みちの歴史研究会」に参加し、運営を支援した。

環境、エネルギーと社会資本整備に関する調査研究

「北海道EV・PHV普及促進検討研究会」の事務局としてEV・PHV関連情報の集約及び情報発信を行った。また、「北海道バイオディーゼル研究会」の事務局として北海道庁環境パネル展への出展等を行った。

北海道の「地域ブランド力」を活かしたビジネスモデルの開発に関する調査研究

「ニセコ羊蹄山麓体験型ツーリズム推進協議会」の事務局として地域特産品の商品開発支援を行った。また、地域の観光コンテンツの開発を目指して農業体験ツアーの企画・運営等を実施。さらに「道北の地域振興を考える研究会」に参加し、意見交換を行った。

気候変動下における雪氷環境に関する調査研究

防雪柵による吹きだまりの成長過程や防雪柵による吹雪の捕捉率についての研究成果の整理、論文作成を行った。また、道東地域において防雪柵及び防雪林周辺での吹きだまりや視程障害に関する調査を継続した。

北海道の地域防災に関する調査研究

「ほっかいどう防災教育協働ネットワーク」に参加し、地域防災力向上方策等について検討。また、「厳冬期避難所展開・宿泊演習2020」に参加し、日本赤十字社等と情報交換を行うとともに、グループディスカッションを体験者の知見としてとりまとめた。

北海道新幹線開業による2次交通及び周遊観光に関する調査研究

北海道新幹線の経済効果を全道に広く波及させるために、北海道新幹線とレンタカーを組み合わせた北海道観光の可能性や二次交通のあり方等について調査研究を行った。



歴史・文化を活かした道南サイクルツーリズム推進協議会との連携で開催した台湾招へいツアーの様子

学校教育との連携による社会的ジレンマ問題の解消に関する調査研究

NPO法人ほっかいどう学推進フォーラムが主催した設立記念シンポジウム、「ほっかいどう学連続セミナー」の開催支援を行った。また、(株)アドバコムとの共催により「みんなで考える公共交通アイデアコンテスト」を実施した。

北海道の歴史・文化を活用したヘリテージツーリズムに関する調査研究

アイヌ文化についての勉強会、アイヌ語地名勉強会を開催し、内容を「開発こうほう」に掲載。また、松浦武四郎の足跡とアイヌ語地名をたどるウォーキングコースの造成と観光パンフレット作成等を行った。さらに世界的なネイチャーツーリズム団体ATT Aの世界サミットに参加した。

技術資料等のデータベース化に関する調査研究

最新の社会資本整備技術資料等を収集・整理し、データベース化、ホームページ上での公開等に関する調査検討を行った。

「寒地開発技術委員会」の設置

「寒地開発技術委員会」を継続して設置し、積雪寒冷地の道路設計に係る検討を行った。また、「道路設計幹事会」を開催して調査研究の方針を検討するとともに、積雪寒冷地の道路設計に係る課題と対応について調査検討を行った。

沿道の環境を守り、活用する団体への支援事業

「沿道の環境を守り、活用する事業に関する共同研究事業」について審査委員会を開催し、令和元年度の事業採択及び平成30年度の事業報告と優秀事例の選考を行った。受賞団体を対象に「日本風景街道大学宮崎本校」への派遣研修事業を実施。また、情報誌「Scenic Byway」製作発行等地域情報の提供も継続して実施した。



写真左:「さわらフラワーロード」花植え 森町 砂原市街地国道278号沿線 写真右:情報誌 Scenic Byway vol.24



開発事業等に関する調査研究の受託…計86件

学会・協会等への会員としての参加…計19件

調査研究成果等の紹介及び普及

- ニュースレター (dec monthly) の発行12回
- ホームページの更新 (<http://www.decnet.or.jp/>)
- 学会・シンポジウム等での研究発表等

出版刊行図書

- 「第35回 寒地技術シンポジウム論文・報告論文集、概要集」(概要集等を会員・関係者に配布(頒布))
- 「第19回『野生生物と交通』研究発表会講演論文集」の編集

シンポジウム等

- 第35回 寒地技術シンポジウム(開催地:札幌市)
- 第19回「野生生物と交通」研究発表会(開催地:札幌市)
- 地域政策研究セミナー等の開催(2件開催)

国際交流

- 米国シーニックバイウェイ関係機関との交流
- ISCORD2019(寒地開発に関する国際シンポジウム)フィンランド・オウル大会への参加
- 第18回 日中冬期道路交通ワークショップ(中華人民共和国遼寧省瀋陽)の開催



ほっかいどう学推進フォーラム設立記念シンポジウム
写真左:新保理事長挨拶 写真上:パネルディスカッション



第35回 寒地技術シンポジウム
写真上:特別講演 児玉毅氏
写真左:開会式の様子



ISCORD2019(寒地開発に関する国際シンポジウム)メイン会場の様子



デックマンスリー

自主プロジェクト

寒地開発技術に関する情報・資料の収集整理

「雪氷研究大会」を始め、「第35回寒地技術シンポジウム」、「第18回日中冬期道路交通ワークショップ」、「第99回TRB年次総会」等に参加し、技術情報を収集した。

令和2年度 事業計画

本年度、decが取り組む事業について、2020年5月14日理事会(みなし決議)で承認された事業計画に基づき、ご紹介いたします。

調査研究等〔自主研究〕

- ◆ 雪氷障害に備えた安全な社会基盤に関する研究
- ◆ 地域コミュニティを通じた地域振興及び観光まちづくりに関する調査研究
- ◆ モビリティ・マネジメントや新技術を活用した公共交通の維持・発展に関する調査研究
- ◆ 北海道の自然・文化・歴史等を活用したツーリズムに関する調査研究
- ◆ ほっかいどう学の推進に関する調査研究
- ◆ 野生生物との共生に関する調査研究
- ◆ 北海道の地域防災に関する調査研究
- ◆ 北海道総合計画の推進に関する調査研究

〔自主プロジェクト〕

- ◆ 寒地開発技術に関する情報・資料の収集整理
- ◆ 技術資料等のデータベース化
- ◆ 「寒地開発技術委員会」の開催と運営
- ◆ インターンシップ制度
- ◆ 沿道の環境を守り、活用する団体への支援事業

〔開発事業等に関する調査研究の受託〕

調査研究成果等の紹介及び普及

- ◆ ニュースレター (dec monthly) の発行12回
- ◆ ホームページの更新 <http://www.decnet.or.jp/>
- ◆ 調査研究資料等の発行(随時)
- ◆ 学会・シンポジウム等での研究発表等

出版刊行図書

- ◆ 「寒地技術論文・報告集vol.36」(「第36回 寒地技術シンポジウム」資料、会員・関係者に頒布)
- ◆ 「第20回『野生生物と交通』研究発表会講演論文集」の編集

その他(新型コロナウイルス対応) 令和2年度の各種受託事業及び自主事業等については、今般の新型コロナウイルスの感染拡大に関して、政府から緊急事態宣言が発令されたことから、今後の状況に応じて柔軟に対応していくこととします。

シンポジウム、セミナーの開催

- ◆ 第36回 寒地技術シンポジウム(開催地:札幌市)
- ◆ 第20回「野生生物と交通」研究発表会(開催地:札幌市)
- ◆ 地域政策研究セミナー等の開催(年4回程度)

国際交流

- ◆ PIARC 国際冬期道路会議冬期道路委員会との情報交換
- ◆ 米国シーニックバイウェイ関係機関との情報交換
- ◆ 第20回日中冬期道路交通ワークショップの開催準備

日本風景街道大学 in 宮崎 参加報告 原 文宏(地域政策研究所所長)

宮崎県の日南海岸地域シーニックバイウェイ推進協議会が中心となって10回目となる「日本風景街道 宮崎本校」が令和2年1月10日(金)～11日(土)に宮崎大学を会場に開催されました。今年度は“きらめく人・多様な連携は地域を育む”を全体テーマに、パネルディスカッション、講演、フロアセッション、テーマセッション、自転車やバスでのエクスカーション等が行われましたが、その中で、講演とフロアセッションを中心に私見も交えて概要を紹介します。

◆◆ 講演 ◆◆

日本風景街道と道路協力団体と道の駅

渡辺 学氏(国土交通省道路局環境安全・防災課長)

講演の中心は、日本風景街道による道路協力団体制度の活用や道の駅との連携でした。まず、道の駅ですが、令和元年11月18日に「新『道の駅』のあり方検討会」による「『道の駅』第3ステージへ」と題した提言について紹介がありました。その中で2025年の道の駅の姿とされた3点の一つ「道の駅」を世界ブランドへの主要な取り組みとして日本風景街道等との連携が明記されたことは、両者の連携に弾みをつける、とても大きな一歩と思います。

また、講演を聞いて拠点機能が優れた道の駅と広域的に活動する日本風景街道がお互いの持ち味を活かして、お互いにメリットのある関係づくりを求められていることを再認識しました。例えば、道の駅は指定管理者制度で民間企業に運営を任せているケースが多いのですが、経営面からどうしても物販やレストラン等の運営に重点が置かれ、情報提供や観光等での地域連携にまで

マンパワーをさけない状況です。そこを日本風景街道が補完するような形で連携し、地域の魅力向上に活かす関係構築が、道の駅側にもわかりやすいと感じました。

ただ、日本風景街道の活動団体も予算や人材が潤沢なわけではなく、多くの活動団体は活動費用の捻出に頭を痛めているのが現状です。そこで、期待されるのが道路協力団体制度です。

意外だったのは、全国で指定されている道路協力団体が31団体(内、日本風景街道関係が10団体)と少ないことです。そこで、より広く活用してもらうために制度が改善されたことも講演の中で報告されました。改善点は2点です。

一点目は、従来、収益事業の2号業務※1が実施できるのは1号業務(道路清掃等)の実施区間内でなければなりませんでしたが見直されて1号業務以外の2号業務～6号業務※2も活動実績として申請が可能になり、その実施区間内の道の駅、無人PA、駅前広場などでの収益活動が可能になりました。

二点目は、2号業務で得られた収益は、道路清掃や花植等の1号業務にしか使えませんでした。今後は1号業務～6号業務のすべてに充当できる

ことになりました。

以上のように、人が集まりやすい場所での収益活動を行い、その収益を様々な日本風景街道の活動に充当することができるようになりましたので、この制度をうまく活用するための地域の知恵や工夫が求められていると思いますし、道の駅との連携は欠かせないと思いました。



渡辺学氏(国土交通省道路局環境安全・防災課長)

※1【道路協力団体制度】 道路における身近な課題の解消や道路利用者のニーズへのきめ細やかな対応などの業務に自発的に取り組む民間団体等を支援する制度で、道路清掃や花植えなどの公益活動を行う団体に対して、道路敷地内での収益活動を認め、その収益を公益活動に活用することができるようになります。

※2 制度の中で行われる業務は、1号業務から6号業務まであります。具体的には、1号業務(道路の清掃等)、2号業務(利益増進・収益活動)、3号業務(情報・資料収集)、4号業務(調査研究)、5号業務(知識の普及啓発)、6号業務(各号の付帯業務)です。

◆◆ フロアセッション ◆◆

ガーデンツーリズムを主要テーマに、以下の4人の話題提供のあと、福永栄子氏(㈱アイロード)の進行でフロアの参加者を含めて意見交換を行いました。それぞれの話題提供の概要を紹介します。

ガーデンツーリズム登録制度について

和田 慎太郎氏(国道交通省都市局公園緑地・景観課課長補佐)

庭園間交流連携促進計画「宮崎花旅 365」による地域の活性化

寺原 誠氏(宮崎市景観課課長)

わたしの『みやぎの花とツーリズム』

川口 のり子氏(FlowerBoutiqueアナーセン)

インバウンド観光とモビリティ

原 文宏(一社)シーニックバイウェイ支援センター代表理事)

和田氏からは、複数の官民庭園の連携による魅力的な体験や交流の創出による地域の活性化と庭園文化の普及を図ることを目的とした国土交通省の「庭園間交流連携促進計画登録制度(ガーデンツーリズム登録制度)」について、その背景、目的と、登録されている8地域(令和元年10月現在)について、個別に概要が紹介されました。

この制度により登録されたガーデンツーリズム計画の一つが「宮崎花旅365」です。宮崎市役所の寺原氏が

らは、本計画の理念には宮崎県の「観光の父」と呼ばれる故岩切章太郎氏の思いが受け継がれていること、11か所のガーデンが参加した同計画の内容、ガーデンと食、歴史、アクティビティを組み合わせたツーリズムの展開や多様な事業者との連携等による地域活性化への思いが語られました。

宮崎市で花屋を営みながらガーデンツーリズムを実践する川口氏の話も、岩切氏の「花や木は大地に絵を描く絵具」という言葉からはじまりました。自分の花屋を中心とした様々な取り組み事例の紹介と小さな取り組みをコツコツと繋いでいくことの大切さを語られ、花の力で宮崎がもっと輝くことに確信をもっていることが伝わってきました。

私からは、海外から北海道にくる観光客にとって花は大きな観光資源になっていますが、モビリティの整備も重要であることを、ガーデンツーリズムの先鞭となった「北海道ガーデン街道」が道東自動車道(札幌・千歳空港と帯広市を結ぶ区間)の開通がきっかけになったことを事例に、高速道路等の社会資本を活用して、潜在的な観光資源を上手にプロモーションすることで顕在化させることの可能性を紹介しました。



令和元年度「日本風景街道大学 宮崎本校」参加者



フロアセッションの様子

◆◆ おわりに ◆◆

翌日、行われたエクスカーションは、宮崎市内のガーデンを巡るツアーでした。季節は1月なので花は豊富ではありませんでしたが、形態の違うガーデンや隣接するカフェ等を楽しむことができました。私は自転車で回るツアーを選んだので、あぜ道や林の中の自転車道など、移動中の景色も楽しむことができ、宮崎市全体がガーデンのように感じることができました。まさに「岩切イズム」を感じるツアーでした。

なお、それぞれの発表資料等の詳細はNPO法人日本風景街道コミュニティのWebに公開される予定です。



自転車エクスカーショ

文責:dec